南欧の風に吹かれて

（天正遣欧少年使節の足跡を辿る旅）

地球上には不思議とくつろぎ、気が満ち、力がみなぎりパワーがもらえる場所がいくつかある。宇宙と自然（じねん）と自分との一体感の中で自分の魂が洗われてゆくことに気づく空間。

古代より聖地や寺院や教会はそんな所に建っていることでもわかる。

南欧の風に吹かれていると、見はるかす地平の向こうに、幻かも知れない夢を求めて旅、また地球を歩き続けることにしました。

南島原市　木村優仁

行　程　表		
８／１（水） ８／２（木）	出国	長崎空港　→　関西国際空港 関西国際空港　→　パリシャルルドゴール空港　→　リスボン空港
８／３（金）	・エヴォラ	＊エヴォラ市長表敬訪問　＊エヴォラ市の皆様と会食 ＊ディアナ神殿＊エヴォラ美術館＊エヴォラ大聖堂＊エヴォラ大学 ＊サン・フランシスコ教会＊人骨堂 ＊エヴォラ市の皆様と会食
８／４（土）	・シントラ・リスボン	＊シントラ王宮 ＊サン・ロッヶ教会＊ジェロニモス修道院（世界遺産）
８／５（日）	リスボン・ナザレ コインプラ	＊ノッサ・セニョーラ・ダ・ナザレ教会 ＊新カテドラル＊旧カテドラル ＊涙の館＊コインプラ旧大学
８／６（月）	コインプラ・リスボン ローマ	リスボン空港　→　ローマ空港
８／７（火）	ローマ・バチカン市国 ローマ	＊バチカン市国＊サンピエトロ大聖堂 ＊バチカン美術館＊システィーナ礼拝堂 ＊ラテラノ教会＊ジェズ教会
８／８（水）	ローマ・カステルガンドルフ・キエーティ	＊ローマ法王庁避暑地（カステルガンドルフ）にて法王に特別謁見 ＊島原手延そうめんを献上 ＊大司教との特別会見 ＊キエーティ市長表敬訪問（バルベッラ美術館にて） ＊歓迎レセプション（ローマ時代の遺跡の真中にて） ＊自衛隊の音楽祭に参加＊クラシック音楽会にご招待 ＊現地学生との交流＊ホームスティ ＊８人の使節は、各ホストファミリー宅へ
８／９（木）	キエーティ・ローマ	＊キエーティ市（ヴァウニャーン神父ゆかりの地） ＊サン・ジュスティーン広場 ＊マッルチーノ劇場＊美術館 ＊キエーティ市の皆様と会食（財団前の広場） ＊ホームスティ先の人たちとのお別れの会
８／１０（金） ８／１１（土）	帰国　ローマ発 　　日本着	レオナルドダビンチ空港　→　パリシャルルドゴール空港 関西国際空港　→　長崎空港

リスボン空港

ローマ法王に献上

セビリアの聖母銅版画

ハイブリッド輪状二層めん

出発式（市役所本庁前）

公式のポロシャツ

エールフランス航空機は、高度三千メートルを保ち、水平飛行にはいり２０分ほど飛び、街路灯がぼんやりと球状に連なったように見える町並みの上空をゆっくりと高度を下げてリスボン空港に着陸した。タラップを降りると、地中海よりの南欧の乾いた風が流れてくる。

この旅は、平成９年に遺跡文化事業街おこし推進事業の事務局及び推進委員（スペインとの交易担当）として、両国相互に交易担当者を常駐させる計画で、ジェトロなど廻わり事業を推進していた。同時期に銅版画が復元され、急遽ローマ法王に献上することとなり平成１０年１２月２１日からの訪問でした。だが諸般の事情にて参加できなかった思い出があります。

その模様は、１９９８年（H10年）１２月２３日、バチカン市国はパウロ６世ホールにて、ローマ法王ヨハネ・パウロ２世の壇上に上り持参した銅版画を手渡された。法王は、説明を聞き終えると、右手を版画の上にのせ、「ながさき　ありがとう」とはっきりした日本語で労い言葉を言われたそうです。版画が「セビリアの聖母」と呼ばれる由来は、スペインのセビリア大聖堂内に描かれた「アンティグア（古代）の聖母」という有名な壁画を模しているからです。コロンブスもその壁画の前にひざまづき、そしてお祈りして航海に出たといいます。墓はこの聖堂内に安置されています。

そこで、銅版画の復刻版と共に、わたくしの監修製作した「ハイブリッド輪状二層めん」を献上してもらうことにしました。この輪状二層めんは、通常同一麺帯であるが、異質の麺帯の組み合わせであり、外が固く中心にゆくほどやわらかい「ふくよかな食感」を追求し、伝統的な製法に新たな技を加え完成させています。お湯の浸透が早いので茹であがりが早く、煮くずれ及び茹でのびしにくい特性を持ちます。異質麺帯の最大利点を極限まで引き出した世界に例がない手延べ製法による特殊麺です。ラー王が機械の二層麺ですが、その以前に開発した画期的な特殊手延めんです。その麺を桐箱、和紙、線香巻き、２本だけを白絹で包み、桐箱を紫絹布で包み、５箱作成して１箱を手元に置き、４箱を送り出しました。ローマ法王に献上、スペインセビリア大聖堂に献呈、セビリア市長に贈呈、セビリア商工会議所会頭に贈呈のためです。

「幾多の迫害や重税に堪え忍び、農業の副業として携わってきた手延べそうめんも、地球上最大の産地を形成するに至りました。明日を夢見た先人、命を支え続けながら食文化の歴史を育み、そして味わいの中に幾世代の心を今に伝える島原手延べそうめんを、ここに献上いたします。」　本文は桐箱の中蓋に刻印した原文です。

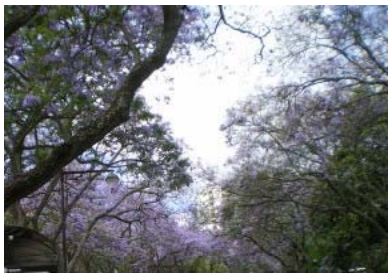
このような機会が、私の人生に再度巡ってこようとは思ってもいませんでした。口之津開港450年記念事業として「平成遣欧少年使節」が南欧に派遣されることとなり、わたくしも同行させてもらうことにいたしました。天正遣欧使節の足跡を辿るもので、ポルトガル、イタリア、バチカン市国を１１日間かけての訪問です。

当時と同様に北有馬にあった日本初の神学校セミナリヨを再現して２２名の中より南島原市４名、全国より４名を選出されました。市役所本庁前での出発式には、市の関係者や市民やテレビ・新聞社など多くの方々が見守る中、長門副市長の激励の言葉、藤原団長（市長）の挨拶、続いて少年使節を代表して、隈部亮佑君が決意表明した。バスは、長崎空港にへと向かい、空港で大分の深野果南さんと福岡の浅野未来さんと合流して関西空

関空～パリ間の機内にて

コルク樫

コウノトリの巣



ジャカランダの青紫の花の並木

ローマ時代の風呂

エヴォラ市長の歓迎の挨拶

港に飛び立った。大阪では、東京の近藤聡一郎君と神奈川の森田洋史君と合流した。エールフランス航空機は、パリのシャルルドゴール空港を目指して飛び立ち、１２時間３０分後に到着。乗り継ぎして２時間３０分でリスボン空港に着き、時計は２２時を過ぎていた。荷物を受け取りホテルに向かうが全員がお腹が空いている。１２時間以上も乗ると、食事は３回くらい出ていたが、軽食を入れて２回出て、後は飲食コーナーが２ケ所設けられ、自由に飲食ができるように成っている。食事後の３時間後にオープンしますと、案内されたが、利用する人は少ない。私が説明して利用する人も多かった。その間乗務員は、特殊ドアから下の階にみんなが降りていってしまう。時折上がってくる乗務員を捕まえてオーダーすると、いろんな引き出しから食べ物や飲み物を出してくれる。暖かいコーンスープとサンドイッチをもらった。

リスボン空港出口で市長を呼ぶ声が聞こえた。南島原市有家町出身の音楽家の豊島さんだった。娘のソプラノ歌手豊島文さんは、イタリアピアチェンツァ県に在住されている。これよりオリンピックを見にロンドンに廻るとのことである。本空港は、リスボン市の北にあり、市街地と近接しているためアクセスはよいが、市街地の直上を通るため、騒音も激しく拡張もできなく離着陸も危険を伴う空港であり、何度か移転を考えたが、そのままという。

次の日の朝、ホテルを内を散歩すると、プールがあり建物や部屋も綺麗である。朝食は、堅いパンで野菜が少ないので、日本人には向かないと思うが、食べないと日程表には日本食の設定日もない。

最初の訪問地のエヴォラに向かう。ガイド兼通訳は入江ミサさんで、バスの中でポルトガル語の勉強とバスから見える風景の案内である。高速をひた走ると、周りはコルク樫の木ばかりである。ポルトガルは世界のコルク生産量の７０％を有すると言われ国の保護樹木に成っている。植樹後２５年ほどたってから最初の剥皮があるが、最初の皮はデコボコがあって適さないので９年毎に剥皮されるそうです。少年使節は、４日間かけてエヴォラに着いており、１日は川遊びをしている。時折、高圧線にコウノトリが巣を作っており、夏にポルトガルで過ごし、冬にはアフリカに行くらしい。入江さんがポルトガルジョークを言い出した。親子の会話で、父親が息子に「カタツムリを捕まえてこい。」と言ったら、２時間後に１匹捕まえてきた。たったの一匹かと言ったら。息子は「２匹目を捕まえようとした間に１匹目に逃げられたから」と言った。日本人の感覚と違うように感じると言われたが、私なら、取るのが面倒だからお店より２匹を買ってきました。「買ったツー（２）もり」と。

高速を降りてエヴォラに近付くと、ジャカランダの青紫の花の並木が続く。ホテル前で降りて市役所まで歩く。狭い石畳の道を車が速いスピードでひっきりなしに通りすぎる。みんな窓を開けており、涼しいのだろう。陰に入ると風が心地よい。馬車が観光客を乗せて時折、通っていく。

エヴォラ（Évora）市は、ポルトガル南東部アレンテージョ地方にある町で人口は５万５千人で５ｋｍの城壁で囲まれた町である。スペイン国境に近い。ローマ帝国時代からアレンテージョ地方の中心地として栄え、ルネサンスの時代には、大学もおかれた学芸の町で、1584 年 9 月には、天正遣欧少年使節が立ち寄った町でもある。1986 年 UNESCO の世界文化遺産に

藤原市長の挨拶

プレゼントの交換

ポルトガル大使

大使夫人(左)市長夫人(右)

会食の風景

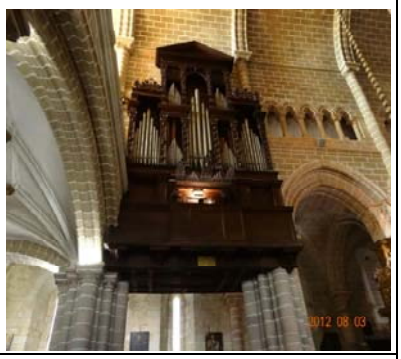
ホセ・エルネスト・オリベイラ市長

登録されています。

市役所に着くと関係部署の職員さんに出迎えてもらい、挨拶後、すぐに市役所改装工事の時に偶然にローマ時代の風呂が見つかったと、そちらを先に案内された。丁度、飛行機の中で阿部寛が古代ローマ人を演じる“風呂映画”『テルマエ・ロマエ』(ラテン語で“ローマの風呂”の意味)を見てきた。ローマ人にとって公衆浴場は社会生活の重要な一部で公的施設として建設され、貧富の差を問わず誰でも利用できた。飲食、運動、読書、商売、議論などができる場所だった。外国人になぜ毎日公衆浴場に行くのか訊かれ、ローマ皇帝は「1 日に 2 回行くだけの時間をとれないからだ」と応えた皇帝は市民を喜ばせ、自らの名声を後世に残すために公衆浴場を築いた。裕福なローマ人はローマ市民の名声を得たいとき、公衆浴場を 1 日貸切にして一般に無料公開したらしいと説明を受けて写真を数枚取った。

二階に案内されて指定位置に着いていると、エヴォラ市長と副市長が入って来られ、その後に日本人夫婦と秘書のような方が続いて入ってこられた。それは、ポルトガル特命全権大使の四宮夫妻と一等書記官の近藤さんだった。両市の挨拶後、両市の紹介、エヴォラ市はビデオにて紹介された。エヴォラ市長は、「本日、このようにして皆様を歓迎することを誇りを思います。本日の会を実りあるものにしたい。また、四宮大使のご協力に深く感謝申し上げます。そして皆様にエヴォラを紹介する機会を与えていただきうれしく思います。この会の意義は２つあります。ひとつは、互いの歴史的遺産を若い人たちが守り伝えて行くこと。もうひとつは、日本の若い人にエヴォラの町を知っていただく機会をもてて嬉しいことです。４少年使節が本市に立ち寄り文化的知識を習得されたことに大きな意義があります。最後にもう一度、藤原市長並びに一行様、昔からもともとあった友愛を今後も続けていきたいと思います。四宮大使ご夫妻ありがとうございました。今後も両市の友好を続けていきたいので、ご協力を切にお願いします。」とあった。続いて藤原市長は、「盛大に歓迎していただき感謝申し上げます。続いて歴史的流れとエヴォラ市との関わりを説明して、今後の両市の歴史的繋がりだけではなく経済的交流を提案して挨拶とされた。(歴史的内容は省略)」意見交換では、わたくしは、麺文化に触れた。「南島原市は、麺では世界最大の麺の産地を形成しており、多種多様の麺が生産されているが、こちらにはどのような麺がありますか。」の質問に市長は、「小麦粉を利用してはパンが中心であり、麺と言うものはない。そうめんとはどのようなものか。」とあったので、市の職員さんが土産用の島原手延そうめんを開封して市長に手渡す。私が「たっぷりのお湯でゆがき、水洗いして、夏は冷やしてトビウオや鰹のだしで食べる。」と答えたところ市長は「早速家で食べたいと」と話された。プレゼントの交換して、藤原市長は、「９月２２日・２３日の口之津開港４５０年記念事業にご招待したい」要請された。続いてポルトガル特命全権大使の四宮大使は、「両市の友好親善を最大限にバックアップしたい。式典にも参加したい。」と言われ、プレゼントを渡された。全員にて市役所の入り口で記念写真を撮り会食会場に向かった。レストランの前の町の真中にローマ時代のディアナ神殿がある。ディア ナ神殿は２世紀末のローマ時代に造られたコリント様式の遺構で花崗岩の円柱１４本が残っている。柱頭が崩落した柱もありますが、イベリア半島に現存するローマ神殿の中では保存状態はいい方と言われている。

ディアナ神殿



エヴォラ大聖堂のパイプオルガン

現地の子どもたち（交流会）

エヴォラ美術館

サン･フランシスコ教会

エヴォラ大学

月の女神ディアナに捧げられた神殿で、円柱の基台と柱頭には近郊のエストレモスで産出された大理石が使われている。

午後からは、子供たちは、現地の生徒たちとの交流会である。その間大人たちは、近くの遺跡などを見学した。再度合流してエヴォラ大聖堂に向かう。１５８４年９月に天正遣欧少年使節は訪れ、イエズス会のエスビリト･サント学院に１週間滞在し、天正遣欧少年使節の伊東マンショと千々石ミゲルがパイプオルガンの演奏の腕前を披露して喝采を浴びた。お世話に成ったブラカンザ家は、ポルトガルで最も有力な一族で、ドン・テオトニオは、ブラカンザ公爵の息子であった。壁に取り付けられたオルガンはイベリア･パイプオルガンといい、ヨーロッパに２台しか現存していなく弾ける人は世界中でも数少ない。

エヴォラ美術館は、１４世紀の受胎告知の像や１６世紀の三位一体の像、大理石の女神の浮き彫りなどが展示されている。

●サン･フランシスコ教会

16 世紀の初めにフランシスコ派の修道士のために建立されたゴシック様式の教会で、正面の祭壇は大理石で、左右にはサンタ･ルチアとサン･アントニオの像が安置され、周囲の壁にはフランシスコ派の物語が描かれていました。教会内の両側にマリア像などの礼拝堂が並びガラスケースに黒衣の女性が横たわっています。隣接して人骨のチャペルがあることで知られています。

「人骨の家」と呼ばれる礼拝堂の入口には「みなさんを歓迎します」との碑文があります。壁や柱が 5000 体もの人骨で埋め尽くされ、写真撮影は有料でしたが、特別に無料にしれくれました。気分が悪くなり写真を枚撮りましたが、すぐ外に出て破棄してしまいました。

続いて行ったエヴォラ大学も名門校で大聖堂の近くに位置し、１５５９年にイエズス会が建てた神学校が前身である。回廊に面して教室が並んでおり、壁のアズレージョを見ると、どんな学科の教室かわかるように成っている。国内各地から集まり多くの学生が学ぶようになったので、エヴォラもまた学問の町と言われるようになった。

ホテルに帰りシャワーを浴びて会食会場に向かった。オリンピックが気になるらしくテレビを夢中である。ポルトガル語で天ぷらは tempero （調味料・味付けるの意）で、衣に味付けてあった。そしてカステラについても聞いた。

カステラの語源は、中国の生地「絽＝ろ」という意味もあり、「ふわふわして柔らかい絽のようなボーロ」と言う説。

ポルトガル人がパン･デ・ロの作り方を日本人に教えた時に、卵白を十分に泡立て、「お城（castelo）のように高く角が立つくらいに卵白を十分に泡立てて」とのアドバイスの「カステロ」がいつの間にか「カステラ」に成ったと言う説。

カスティリャ王国のお菓子がポルトガルに渡り、パォン・デ・カステラとポルトガルで呼ばれていたものが、日本に渡った。その間に、ポルトガルではパォン・デ・カステラの原型をポルトガル式に工夫し、名前もパォン･デ･ロとなった。と、準備してあるように詳細に説明を受けた。会食後は南欧の湿度の低いそよ風をほろ酔い加減の頬に受けて、全身を南欧の風に吹かれてホテルまで歩いて帰りました。

パォン･デ･ロ

サムライの回転寿司

城壁の門

ロータリー交差点

整列した商品群

白鳥の間

次の朝、部屋をよく見ると、リンゴとワインとオリーブオイルが、お土産として置いてあった。カメラを持ってホテルの廻りを散歩すると、路地の裏に｢SAMURAI｣と言う名の寿司屋があった。ブッフェスタイルで食べることができ、鉄板焼きもあり、価格の中心は１０～１１ユーロくらいで持ち帰りも出来るようだ。昨夜知っていたら寄ったと思う。路地を抜けて歩いていると若い女性がテラスのテーブルを除菌している姿が目についた。城壁の門をくぐって外に出ると、ひっきりなしに自動車が通過していく。このロータリー交差点は、中心の島の周囲を一方向に周回する方式のもので、信号はないが渋滞がないように感じる。直交する交通が無く、またある程度通行速度を落とす必要があるため、事故率が低くなる。信号が無いため、錯綜する交通がなければ一時停止する必要が無い。また、信号の維持費がかからない。環状路を一周することで U ターンが容易にできる。などの利点がある。

リスボンの方向に向かうと、広大な草原に馬、牛、羊を放牧している。サービスエリアの売店では、飲食コーナーとコンビニを１人の女性が、がんばっていた。アイスが綺麗に並べられている。日本でも種類や量が少ないときのレイアウト方法であり、寄る店、商品量が少ないように感じている。アウトレットに行くバスと隣り合わせになった。デパートやショッピングセンターやアウトレットが出来たばかりらしいです。

シントラが近くにつれて松林が多くなり、松ヤニを採取している。樹齢１５年ぐらいの物で胸高直径１６㎝以上のものから採取し、１本の木から年間約２ Kg の松やにが取れますが、この中から松ヤニ（ロジン）として約７０％、テレビンとして約１５％が取れる。１本から松ヤニを採取する期間は、大体３年～９年間で、その種類は海岸松である。人件費が安くないとこのようなことは出来ない。シントラに入ると住宅やアパートも全て煙突が付いている。

■シントラ王宮

シントラ王宮を訪問した。専門ガイドのエレナさんが担当する。穏やかな景観は山頂のペナ城とともに「シントラの文化的景観」として 1995 年、世界文化遺産に登録されました。長崎県大村市とは姉妹都市をしています。シントラが王族たちの避暑地となったのは、13 世紀のディニス王の時代でイスラム教徒のムーア人が残した建物が王宮に改造されたのがきっかけでした。18 世紀ごろには貴族や金持ちが競って別荘を建てました。町の主な見どころとしては、シントラ王宮や緑の中に瀟洒な別荘が建つ風景、ムーアの泉、市庁舎、９世紀ごろのムーア人の城塞跡があります。王宮の正式名は「パラシオ･ナショナル･デ･シントラ」です。1584 年 8 月、ポルトガルに上陸していた天正遣欧使節の一行がシントラの王宮を訪れ白鳥の間で、1585 年 10 月、伊東マンショ、千々石ミゲルらの天正遣欧使節一行はアルベルト･デ･アウストリア公爵に謁見しました。天井に 27 羽の白鳥が描かれています。17 世紀の作で、どの白鳥もポーズは違い、首に王冠を飾っています。王が嫁ぐ姫を思って描かせ、礼拝堂には 14 世紀の天井装飾がそのまま残り、床に精緻なアズレージョが敷き詰められていました。台所には大きな釜が並んでいます。王宮前には観光客目当ての土産物店が並んでいたので、壁掛用のコルク製品を買った。他に陶器や布の工芸品のほか、シントラ名物のチーズ入り菓子、ケイジャータも並んでいました。昼食にポル

シントラ王宮

シントラ王宮の正面

タコのリゾット

プレゼント

ジェロニモス修道院

トガル産の米と蛸とエビの定番郷土料理のタコのリゾットがでた。癖があるがタコはやわらくて大人も２杯、３杯食べている子もいました。タマネギを入れ、水を少なめで茹でるらしい。豚足の煮込みもでた。最後にでたお菓子は、京都の八つ橋にはいっているハッカの味が強かった。タコの茹で方で異常にもりあがり、島原半島の「島原半島はしり蛸」も話題にのぼった。父に聞いたら「穴ダコ」のことで、よく取りに行っていた。細く長くて足の先を切って食べなさいと言われており、お腹が痛くなると思って今でも幼い記憶で繰り返している。このレストランは、人気があるのか満席だった。バスまで歩いていると同じTシャツを着ているので聞くと、昨日の現地学生との交流会でいただいたという。

次の訪問先に着く時間を利用してガイドの入江さんが話してくれた。ポルトガルは王室の権力強化のために財源を求めていた。海に囲まれたイベリア半島だから海上貿易に目を付けた。当時一番儲かるのが香辛料貿易だった。香辛料は軽くて輸送しやすいうえ高価で取引された。

当時のヨーロッパでは同じ重さの銀と交換されたというから超高級品で、よく売れ香辛料なしではすまない食生活になっていた。ヨーロッパは緯度が高く、寒冷な地域で、もともと農業生産にあまり向いているところではなかった。だから、小麦などの穀物栽培以外に豚や牛などの家畜も多かった。放し飼いして肥えた秋に屠殺します。肉は干し肉、薫製など保存のために加工と多くは塩漬けにして樽の中につけて置きます。この肉を長い冬の間に食べつなぐわけです。いくら冬は寒いと入っても、肉は傷んでくる。やがて腐りかけた肉なども食べることになる。これが臭い。しかし、我慢して食べていたわけで、腐りかけた肉にかければ臭みが消えるコショウの味を知ると、なくてはならないようになってきます。この香辛料は、インド西海岸のマラバール海岸や、ジャワ、スマトラ、マライ半島で作られていた。クローヴ（ちょうじ）、ナツメグはインドネシアのモルッカ諸島周辺でしか栽培されていませんでした。遙か遠いアジアです。インド商人、アラビア商人、そして、イタリア商人と多くの仲買人を経て運ばれますから、ヨーロッパに来たときは驚くほど高くなるのです。ポルトガルはイタリア商人との別のルートでインドに直接到達する方法を探すことにしたのです。直接インドまで行ければ仲介商人なしだから利益は莫大となり、この時期に羅針盤の改良が行われたり、地球球体説もとなえられるようになり、遠洋航海への技術的な裏付けも整ってきました。また日本では、ポルトガル商人による南蛮貿易が盛んになり、並行してエズス会のカトリック布教の布教も盛んになったが、禁止され交易はオランダに変わってしまった。1639年には幕府の鎖国政策でポルトガル船の日本への来航は禁止し、再開されたのはそれから 240 年を待たなければならなかったのです。

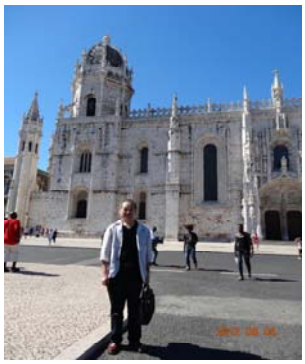
●ベレンの塔(サン･ヴィセンテの砦)世界遺産

川面に佇む白亜の塔は、その優美さから「テージョ川の貴婦人」と讃えられ、作家の故司馬遼太郎さんも著書「街道を行く南蛮の道」で「テージョ川の公女」と表現したほどテージョ川沿いに世界遺産が静かにたたずんでいます。マヌエル１世がテージョ川を行き来する船を監視するための要塞として、1519 年に建てました。塔は高さ 30m の６層からなり、正式にはリスボンの守護聖人にちなんで「サン･ヴィセンテの砦」といいます。テージョ川と大西洋の境目に建つ塔は、上部はポルトガルの城を、下部はカ

ベレンの塔

発見のモニュメント

ジェロニモス修道院



ジェロニモス修道院

ケーブルカー

ラベラ船をモチーフにしたマヌエル様式です。塔は６層のうち４層から上は王族の居室。４層は国王の間、５層は食堂、６層は王族の居室、その上にテラスがあります。３層は兵器庫、２層は砲台です。波が打ち寄せる１層部分は貴婦人や公女の名にはふさわしくない残酷な水牢で、渚に突き出すように出っ張った建物の下部に四角い窓が並んでいます。満潮時にはここから牢の中に水が入って囚人を水攻めで苦しめたそうです。

●発見のモニュメント

エンリケ航海王子の 500 回忌を記念して 1960 年、ヴァスコ･ダ･ガマが船出した場所に設けられました。モニュメントの東西両面に 33 人の像が並んでいます。船首の先頭に立っているのはエンリケ航海王子。３本マストのカラベル船の模型を手にして大西洋を見据えていました。両側に大航海時代を担った天文学者、地理学者、航海者、宣教師などが表されています。西面にはエンリケ王子を含めて 17 人が並んでいます。東面には 16 人。エンリケ王子の後ろには、大航海時代の黄金期を築いたマヌエル１世。次にバスコ･ダ･ガマ、ブラジル発見者のペドロ･アルヴァレス･カブラル、世界を周航したフェルナン･デ･マガリャンイス(マゼラン）ら海洋王国建設に貢献した英雄が並んでいます。宣教師や船員や学者もいます。発見のモニュメント前の広場には、大理石のモザイクで描かれた直径 55m の大きな世界地図があり、世界各地の発見年号が記録されています。日本の発見は 1541 年と表記されていました。1543 年の鉄砲伝来が最初のポルトガル船でとあるが 1541 年にも豊後国（大分県）に漂着した史実に基づいているそうです。

●ジェロニモス修道院（世界遺産）

1502 年、第 14 代ポルトガル王、マヌエル１世の命によって着工して 1551 年に完成しました。石灰岩の建物はその後、増改築が繰り返され、現在の姿になったのは 19 世紀になってからです。いわゆる３００年掛けて建造しており、リスボンで 10 万人が犠牲になった 1755 年の大地震にも耐えて、大航海時代の栄華ぶりをいまに伝えています。南門はマヌエル様式の傑作で 24 人の聖人像、聖職者の像や紋章などの浮き彫りが扉口を囲み、その中央にはエンリケ航海王子の像、天辺には幼いイエス･キリストを抱くマリア聖母像が嵌め込まれています。扉口のアーチ部分にはマヌエル１世の守護聖人、聖ジェロニモスの生涯が描いた彫刻がありました。1584 年に訪れた天正遣欧少年使節の一行も華麗さに驚嘆したと記録されています。修道院はエンリケ航海王子とヴァスコ･ダ･ガマの功績を讃えた顕彰碑ともいわれます。ヴァスコ･ダ･ガマは 1498 年にインド航路を発見し、ポルトガルに貿易発展のチャンスをつくり、ジェロニモス修道院の建設費はガマが得た富でまかなわれています。

●サン･ロケ教会

公園で降りて少し下ると、坂を登ってくるケーブルカーに出会った。さらに下るとサン･ロケ教会がありました。16 世紀に建てられたイタリア･バロック様式の教会で、正面に大きなバラ窓をつけています。ファサードは大地震で破壊し、後年修復されました。教会内にあるサン･ジョアン･バブティスタ礼拝堂は瑠璃（るり）や瑪瑙（めのう）のモザイクで飾られ、市内有数の美しさといわれます。両側にも礼拝室が並んでおり、豪華な装飾が施され、当時の少年達の驚きが感じられるものです。天正遣欧少年使節団が 1584 年に 1 か月間滞在しています。教会の前はちょっとした広場にな

サン･ロケ教会

サン･ロケ教会内部

ペドロ４世広場

ナザレ（プライア）の海岸

ノッサ･セニョーラ･ダ･ナザレ教会

っていて、銅像が建っているので、芸術的なものと思っていたら「宝くじ売り」の銅像らしいです。帰り道に碁盤目の通りの中に灰色の大きな塔が見える。リスボンの市街地が一望できるので、人気がある高さ 32m のサンタ･ジェスタのエレベーターとのこと。帰り道にロシオ広場の横を通り、通称ペドロ 4 世広場の名前が広く知られている。バイシャ・ポンバリーナ地区にあり、かつては民衆の反乱や祝祭、闘牛、公開処刑が行われた場所である。

ホテルに帰り、売店にいった。初日に宿泊したときには知らなかったが、コクル製品など多くのショップがあった。１枚５ユーロのテレフォンカードを２枚買った。すぐにフロントの横の公衆電話で、１枚カード（日本と違いガチッというまで）押し込むと、ポルトガル語でナンバーをどうぞと表示するので、００８１９５７８２００００と自宅の番号を押したら、母が出た。まず途中で切れるからと言って会話始めた。後からわかるが、この５ユーロのカード１枚で、日本に何度も掛けても会話は切れなかった。

リスボンに着き、初日このホテルに宿泊し、次の日エヴォラに泊まり、このホテルは２泊目となる。早めに起きてカードで日本に電話を入れる。毎朝似たような朝食を済ませ、高速中心で２時間半、ナザレに向かってひた走る。ナザレ（プライア）の海岸にはいる前に、夏だけ開催される小さな闘牛場があり、海岸に着くとワゴン車に大きな拡声器をつけた宣伝カーが巡回していた。少年使節は、海の旅の無事を祈って帰国前に立ち寄っています。この海岸を見て加津佐の海岸をおもいおこしたことでしょう。専門ガイドが乗り込んできた。ネウザさんだ。

まず、ノッサ･セニョーラ･ダ･ナザレ教会にはいり、聖母マリアの奇跡で知られるメモリア礼拝堂がある。４世紀、ロマノという僧がイスラエル北部のガリラヤ地方にあるナザレから聖母マリアの像を持参した伝説奇跡によります。聖母マリアの奇跡は１１８２年のある霧の朝の出来事で、愛馬を駆って狩りをしていた城主が岬の先端まで獲物の鹿を追いかけました。勢い余った馬が崖から落ちそうになったとき、聖母マリアが現れて助けてくれたという話です。僧は死ぬ前に聖母マリア像を崖の洞窟に隠しましたが、約４５０年後に羊飼いによって発見され、聖母出現の奇跡話が広がって巡礼者が詰めかけるように成っている。教会を出て右手に行くと広場と展望台になっており、老夫婦で出店している手作り民芸品店が並んでおり、一番高齢らしく夫婦の店でコルクの壁飾りを購入しました。

小聖堂の裏の展望台からはプライヤの海浜風景が一望でき、打ち寄せるさざ波、貸出ミニテント（１週間単位で借りる）が林立する砂浜、道路を挟んで連なるレンガ屋根の建物、その間の空き地には民芸品や土産物が所狭しと並べられている。浜辺には、鰺の開きを辺り一面に干してある。斜面に沿ってケーブルカー行き来しており観光客の利用も多いと言います。レストランや土産店が軒を連ねる海岸通りやソウザ･オリベイラ広場がレジャーの中心です。海に面し海岸を一望できる白亜のレストランで、ナザレ名物の塩茹でのじゃが芋付き鰯の塩焼き（Sardinas　Assadas サルデニア･アサーダ）３匹と巨大なジャガイモ３個を食しました。思ったより美味しかったです。大根おろしならさらに美味しかったと思います。地元及び観光客に人気がある料理だそうです。教会の横にもナツメ椰子の木が植えられており、大航海時代の長船旅で航海士たちがビタミン不足を補う貴重な果

ナザレ海岸のテント

鰯の塩焼き

ナツメ椰子の木

商店街

金平糖

涙の館

実であったと聞きました。使節が見たのは、農民の男は黒っぽい合羽、女は十枚重ねの服を身に着けていたとある。漁村の女性は７枚来ていて、夫の船が７日目に帰ってくるので、１枚ずつ脱いで待ったという。また、７日目ごとに教会に行くので、１枚ずつ着たとの逸話があるそうです。大昔の美女も、なんと膝が見えるミニスカート、頭には毛糸のストール、つっかけを履いて、黒づくめは夫を亡くした婦人らしいです。先に訪れたインカ時代の首都クスコの夕暮れに家路を急ぐ農婦に出会いましたが、その衣装に似ています。また、ポルト（港）とカレ（関所）がポルトガルになったなど、いろいろな話を聞きました。

偏西風が吹き、昔は風車小屋で小麦粉をつき、現在、風力で夏は２割、冬は２．５割を補っており、のこりは石炭の火力、不足するとお隣さんのフランスから分けてもらっているそうです。

次の訪問地のコインブラに向かう。道路の真横の空き地で、あちこちで宴会している。日本なら木々の茂る裏の閑静な場所で行いますが、ポルトガル人は、お酒を好きな人が多く、人に見てもらい注目されたい国民性だそうです。バスはさらに走り。辺りは、松林、ユーカリの木が多い、苗木が安くて成長が早いそうです。パレット、セルロース、松ヤニ、風邪薬にしている。だが両方とも油分が多いので、燃えやすく自然発火するそうで、毎日何処かで火事になっているが、ほったらかしのような話でした。コインブラに入る前に新しいガイドのウォルタールさんが乗り込んできた。

最初に大学の膝元の商店街を歩きました。まず目に付いたのが、金平糖（コンフェイト）がウインドケースに並んでいる。小粒で青や赤色で、味は、ほのかに甘く、甘いだけの砂糖菓子ではないようだ。少しありますので、食味できますので商工会に来て味わってください。さらに歩くと市役所があり、少し引き返して、大学に入る門のところのお店で本を購入した。次に、涙の館を訪問した。あこうの木に似た大木があり、その横に竹林があった。その竹の１本１本に名前が刻まれており名前が大きく育っていた。

コインブラは、１１３９年から１２５５年までポルトガル王国の首都で、イタリアのボローニャ大学（１０８８年)、フランスのソルボンヌ大学（１２５３年)、ここのコインブラ大学(１２９０年)と続き、３番目に古い学問の町です。人口は約１５万人、そのうち２万２千人が学生です。リスボン大学ができるまで、名門校として国内の学術、文化を担ってきました。

使節の一行は、大学付属のイエズス会の学校に泊まって、お世話になっています。入り口で黒いマントの学生が案内していました。創始者のディニス王の像を眺め、鉄製の無情の門を潜りました。無情の門とは、学生たるもの門を入ったら学問以外のことを考えてはならないとの教えから、そのように呼ばれるようになったといわれています。旧大学の一部は現在も法学部の校舎として使用され広場の中央にジョアン３世の像が建っています。庭の周囲にはラテン回廊、図書館、礼拝堂など１５世紀から１６世紀の建物が並んでおり、門を入ってすぐの左側にあるのがラテン回廊。２０世紀までラテン語で講義が行われていたので、学生たちはラテン語で話すように義務づけられていたといいます。建物の中は、国賓が訪れたときにも使われたので、真っ赤な絨毯を敷き詰めた部屋には、権威の象徴である歴代ポルトガル国王の肖像画が飾られていました。新郎新婦のどちらかがコインブラ大学を卒業していれば、ここで結婚式を挙げられると、後で聞